図工・美術部会

一人ひとりの力を引き出す題材と授業をどうつくっていくか

Ⅰ　研究の内容

・子どもの課題や実態にあった題材と授業づくり
一人ひとりの力を引き出すための授業の組み立て方の工夫。子どもの課題や実態をとらえ，どのような力をつけたせたいかを考えた題材設定の研究を深める。
・子どもの表現活動によりそう支援のあり方
子どもか「みて，きいて，かんじて」鑑賞や造形活動に向かうとき，どこで悩み，どのような工夫が生まれたのかを読み取る工夫を模索していく。
子どもの表現活動によりそって，おもいが出る，おもいが出せる支援を考えていく。
・つながりと広がり，先を見通した実践の積み重ね
教職員と子ども，子どもと子ども，小学校・中学校のつながり，保護者とのつながり，教科と教科，題材と題材等の関連・連携を図って美術教育を進め，広げていく工夫を考えていく。

1　研究の柱に沿って小中合同で授業案の検討，実践，検証を行う。また一人一実践による作品研究を実施し，授業のあり方を考える。

（1）　小学校の実践から（９月統一授業研）

『墨のよさや面白さを発見しよう』(小学校６年)　　安富　智恵美（山梨小）

筆だけではなく，ブラシや小さいほうき，スポンジなど様々な描画道具を使用し，墨独特のにじみやかすれ,濃淡を楽しみながら表現する題材であった。子どもたちはそれぞれ，全紙大の紙や，中には梱包財として使われていた何メートルもある長い紙に，思い思いの表現をいきいきと楽しんでいた。体育館でのグループごとの発表会では，それぞれの表現意図を堂々と発表しあい，友達の作品を興味深く鑑賞しあう姿が印象的な実践であった。主に使われていた紙が洋紙だったため，墨独特のにじみやかすれが生かしきれていない面もあったが，子どもたちの表現の幅をひろげるきっかけとなる素晴らしい授業であった。

（2）　中学校の実践から（２月統一授業研）

『言葉をオブジェに』(中学校２年)　　菊島　美香（勝沼中）

生徒それぞれが形にしたい言葉を選び，ウェビング等を使ってその言葉のイメージをひろげて形にしてゆく題材であった。生徒たちはワークシートを基に，グループごとに話し合いをしながら，粘土や木材，アルミ等の様々な材料を試し、作品作りをすすめていた。お互いにアドバイスをしあったり，感想を言い合いながらのびのびと制作を楽しむ姿が見られた授業であった。こういった抽象的な表現主題を扱うとき，生徒たちにどういった言

葉で投げかけ，問いかけをすればよいのか，どんな参考作品を見せればよいのか，改めて難しさと楽しさを感じさせる実践であった。また，様々な材料や用具を自由に扱う授業であったので，それまでの授業で授業規律を確立しておくことの大切さも再確認できた。

（３）県教研レポート

『ふわふわ○○さん』（小学校２年）　古屋　ゆか（勝沼小）

教科書題材を，子どもたちの実態に合わせて改題した実践。柔らかくした新聞紙を入れたビニール袋を縛ったり，留めたりしてできる形を，生きものに見立てて作品をつくっていく授業であった。子どもたちは，ひもを使って縛るという行為に少々苦労しながらも，新聞紙の手触りやビニール袋の形の変化を楽しみ，その子なりの○○さんをつくりだしていた。教科書の題材もそのまま与えるのではなく，子どもたちの実態や状況に応じて，材料や用具に変化をつけることで様々な展開が期待できる。また，造形活動を通して子どもたちにつけさせたい力が技術の習得や習熟に偏らないように，授業のねらいをしっかりもつことが重要であるとの認識が改めて確認された実践であり，高い評価を得ることができた。

Ⅱ　成果と課題

１成果として

研究テーマに沿って，一人ひとりが実践的にとりくむことができた。子どもたちの発達の段階を考えながら美術図工でどんな力をつけさせたらよいのか，そのためにはどんな題材や授業を仕組めばよいのか，全員で研究を深めることができ，質の高い研究協議となった。小中いっしょに研究を進め，それぞれの学校を観てきているので，互いの子どもたちの実態を知りながら，つながりと広がりのある研究をすることができた。
研究のテーマと柱が県と一致し，部会員全員がそのテーマに沿って数年にわたり研究を進めてきているので，討議の内容もぶれずに，濃く深くなってきている。部会の研究が毎回大変勉強になった。今後も，美術図工で「子どもたちのどんな力を引き出したいのか」そのためには，「どんな題材や授業が考えられるのか」を探っていきたい。

２課題として

部会員が少ないので，２回の授業研究は負担に感じるが，小中９年間を見通した授業について考えたり，互いの子どもの様子を見られるよい機会でもあるので，授業案を簡略化するなど工夫していきたい。部会員の減少により，部会員のいる学校が減っている。そのため、学んだことが，他の学校に広がっていきにくい。また，部会内での役割も固定化してしまう。研究の内容が数年にわたり積み重ねられてきているので，外部からの意見交流を取り入れたり，研究会の時間で実技講習や講義等を行うなど工夫していきたい。

（部長　小澤　朋子）